高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」

金山　克哉

1　はじめに

北方を描いた詩人高島高には、「戦争の詩」がある。『山脈地帯』（旗社出版部　昭和十六年二月二十日）の「第一部」にそれらは多数収められている。「あとがき」には次のようにある。

この中には、随分古いものもある。七、八年前、もっとのものもある。だから第二詩集だからといって、必ずしも新しいものばかりとはかぎらない。これを第一部と第二部に分けた。僕の詩の個性の陰陽ともにとも思って分けてみた。　～　略　～　第一部は多く戦争の詩（傍線金山）を採った。又極くはじめの頃のものも入れておいた。第二部はずっと古いのや新しいのがまざって入っている。（昭和十五年八月十日記）

高島自身は戦争に関する詩のことを「戦争詩」「戦場詩」「愛国詩」「国民詩」と呼ばずに「戦争の詩」と素朴に呼んでいる。坪井秀人が『声の祝祭　日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会　一九九七年八月三一日）の中で指摘するように、大東亜戦争が激化するにしたがって詩は国民に対する呼びかけの意味を帯び、詩人は愛国の精神を高揚するための役割を担うことになるが、昭和十六年（一九四一年）の段階で高島があくまでも「戦争の詩」という呼称を使用していることには注目してもよいだろう。「戦争の詩」の「の」を多義的に解釈することが許されるならば、この「の」には、例えば「戦争に関係した詩」「戦争を称揚する詩」「戦争を批判する詩」「戦争に対する割り切れない感情を描いた詩」などの、戦争に対する様々な関与、思索の幅を含んでよいことになるだろう。この「戦争の詩」という呼称は、ナショナリズムによってひとくくりにはできない、〈どのような視点で戦争を視るか〉ということのバリエーションを内包する。だから、高島高の「戦争の詩」は〈文学に描かれた戦争表現の多様性〉へとつながっていくだろう。したがって、高島高

がどのように戦争に対してアプローチしたか、あるいはしなかったかは、その詩作品を読むことでこそ理解される。昭和十七年（一九四二年）に日本放送協会編集『愛国詩集』が刊行されているが、「愛国詩」という呼称が世に広まりつつあった昭和十六年（一九四一年）の時点で、高島高が、おそらく、あえて「戦争の詩」という呼称を使用していることはこのような意味で興味深い。

2、『山脈地帯』巻頭詩「北方五光景」

詩集『山脈地帯』は「北方五光景」という詩から始まる。〈北方の詩人〉とも言うべき高島高の描く風土は、冴え冴えとした寒気の中に、その寒さそのものを生命の象徴として感受する眼を持つ。「北アルプス幻想」「北アルプス雪景」「雪の湖」「立山颪」「北方」の五篇をひとつのまとまりとした「北方五光景」は北の風土の描写に加え、北方を後にして戦地へと赴く者たちの姿が織り込まれている。四つ目の詩「立山颪」に付せられた「註」の中には立山の「厳然、颯爽たる姿体」のすばらしさに触れた後、立山を「北方魂の火のごとき烈々たるシンボルである」とする記述がある。そして、その立山から「今まさに皇国のために満丈の気を吐いている幾多の北方勇士をわれらの第一線に送っている」とする。さらには、「これらあらゆる北方人は、必ず寒冷膚を破る立山颪によって育まれ、又きたえられるのである」とある。つまり、寒冷の風土によって鍛え上げられた北方人は、戦場に赴いても勇壮に戦うことができることを、故郷立山の勇姿に重ね合わせながら述べているのだ。逆の見方をすれば、戦地に赴く者の姿を想像することを機に、改めて〈北方〉という風土の強靭さを見いだしている、とも言えるだろう。

この詩を読む限り、高島高は、理不尽に戦地に駆り出されていく者がいることに対して強い疑問を抱いているわけではない。徴兵システムに対する批判や風刺を試みるというよりも、戦争の理不尽さの中にいながら、戦地に赴く者ひとりひとりの無事を祈る立場で詩を書いている。故郷の風土は、戦地という遠方から思い返されるものとして、変わることのない寒冷の相貌をより冴え渡らせていく。その不変の寒冷こそが、時局に翻弄される兵士たちにとってのよりどころである、と言うように。

3、支那を舞台とした戦争の詩

『山脈地帯』の前半には多く「戦争の詩」が採られているが、そのほとんどが「支那」（中国）を舞台にしたものである。この詩集が刊行された昭和十六年（一九四一年）は、日中戦争を経て太平洋戦争へと時局が軍国一色へと傾斜していくころだ。戦地である支那の詩については、行軍（「夜戦塵」）、兵士たちの日常（「麦　―麦と兵隊に」）、戦死（「日本人に題す」）、兵士らへの慈しみ（「征野」）、生還の安堵（「熱河」）などに触れたものが多い。ニュース映画館で観たイメージから戦地を思い起こし、そこに駐屯する兵士たちのことを慮り、日本の風土を懐かしんでいるだろうその心中を察するような内容のものもある。（『山脈地帯』所収「征野」の中に、ニュース映画館において、祖国を離れ大陸に駐屯する部隊のことに触れた部分がある。）

それらの詩は、日本軍の力を信じる一方で、支那の広大な自然の中に投げ出された兵士たちの無事を祈る優しさに満ちている。支那を舞台にした詩には月光や果てしない空や荒野などが多く描かれ、植生豊かな日本とは全く異なった荒涼とした、広大な、そしての未知の風土に立つ日本兵の姿がまるで影絵のような手法（「青空について（シネ・ポエム）」）で描かれている。モダニズムの手法をまじえ、支那の茫漠たる景色を視覚化している。

しかし、高島高の支那の詩には、敵国を攻撃し殲滅することを称揚した表現はほとんど見受けられない。あくまでも異国の風土の中で受動的に現実を生きなくてはならない兵士たちへの、強いられた状況に対する心痛が詩の土台となっている。

4、仮構された〈戦地〉と〈北方〉の関係

実は、高島高自身の軍医としての従軍経験が昭和十八年（一九四三年）から帰還する昭和二十一年（一九四六年）までの約三年間であることから、『山脈地帯』にある戦争の詩は直接戦地を経験して書かれたものではないことがわかる。だから、詩の中に登場する戦地としての支那は、銃後の生活の中でニュース映画などを通じて得られたイメージを仮構、総合して創り出された〈戦地〉だということになる。かつ、『山脈地帯』に収められた詩篇

は、その「あとがき」によれば「昭和十五年八月十日」から「七、八年前、もっとのもある」とされていることから、昭和六、七年（一九三一年、一九三二年）あたりから昭和十五年（一九四〇年）までの期間に書かれたものと推測することができる。

かつ、昭和三年（一九二八年）東京の日本大学予科に入学、昭和五年（一九三〇年）同大学文科に進み、昭和六年（一九三一年）昭和医学専門学校に入学し直し家業である医師を目指すために学業に励み、そして昭和十一年（一九三六年）同校卒業後には横浜市磯子区にあった市の電気局病院内科に勤務、昭和十六年（一九四一年）父の医院を継ぐために郷里富山県滑川に戻っていることを考慮に入れるならば、戦争の詩はもちろん、〈北方〉を描いた詩の多くも東京、横浜在住時に書かれたということが推し量られる。そのことについては拙稿（「北方の冬　高島高論」『群峰』第三号所収　富山文学の会編集　二〇一七年三月四日）で少し触れているが、今大切なことは、〈支那（つまり戦地）〉〈北方〉の詩のいずれもが、その場所に実際にいながらにして書かれたものではなく、あくまでも異なった場所から思い起こされた仮構の産物だということだ。つまり高島高は、〈仮構された北方〉を〈仮構された戦地〉から思いやる兵士たちの姿を二重、三重に想像して「戦争の詩」を作っていることになる。

想像された戦地から想像された北方を思いやる、という想像。

または、想像された北方が想像された戦地の兵士たちの後押しをする、という想像。

体験主義を超えて想像され、仮構された〈戦地〉と〈北方〉という二つの場所は、詩人の思考のなかでつながりあっているのだ。

5、日本の地名が入った詩

前章では、〈戦地（支那）〉と〈北方（故郷）〉が想像の産物としてありながら、それが互いに有機的なつながりを持っていることについて述べた。

『山脈地帯』の「第一部」にはもう一つ、詩の配列という意味において大きな特徴がある。それは、〈戦地（支那）〉や〈北方（故郷）〉と並置するかたちで、日本国内の具体的な地名を前景化した詩が「戦争の詩」と隣接し

て配されていることだ。

白蛇伝説を呼び水として黒部峡谷の民俗世界を呼び出す「渓潭譜　―黒部峡谷に寄す」、早春の田野風景の中に自然と文化が融合した生命力をたたえる「馬込風景　―或は早春の田野」、萩原朔太郎にあやかりつつ大井町の記憶―ある友のうたえる」、親不知の海岸風景を医師独自の医学用語によって描いた「北の貌　―親不知附近の未明」、晴れた横浜の青空を描く「横浜山上の詩　―ある年の記念のために」、横浜の街なみに乙女の姿を重ね見る「横浜風景」。これらの詩群は、戦争そのものや支那での戦いをテーマにした「北方五光景」、「夜戦塵」、「麦　―麦と兵隊に」、「征野」、「日本人に題す」、「熱河」、「戦い」、「北の銃後」、「野戦病院への手紙」と同じ「第一部」に収められている。

伊勢功治が『『北方の詩』刊行と「麺麭」』（『現代詩手帖』第六十一巻・第四号　二〇一八年四月一日）において、戦争の暗い影が作品世界の陰鬱さに影響を与えていると指摘する「北の貌」以外に、これらの中には戦争の荒涼とした雰囲気を伝えるものはない。一体、なぜこれらの詩が「第一部」に「戦争の詩」とともにおさめられているのか。

これらの詩に登場する土地はすべて高島高ゆかりの場所だ。黒部と親不知は〈北方〉の名所である。馬込や大井町は東京在住時の生活圏であり、文人知人が住む場所でもあった。横浜は高島高が勤務していた病院があった街である。

はるか遠い支那。

それに対して自分を育んだ北の風土や青春時代を過ごした関東の晴れやかな風土。

戦地とは対照的なこれらの土地を支那の風景と並置する理由は何か。それは推し量るに、空間の同時性ではないだろうか。想像力によって視ることが可能になった〈戦地〉もまた詩の中では確かに存在する現実であり、かつ、生活の基盤となっている日常的な街の風景もまた確かな現実である。これらかけ離れた二つの現実が反発もせず、矛盾もせず、浸食もせず平然と同時に存在しているという当然。世界にはいくつもの〈場所〉が時を同じくして存在しており、どちらかの世界がもう一方の世界を所有することなどできないはずだ、とでも言うように。そし

て、おそらく戦地に献ずるという思いが込められたこの詩集は、日本国内の具体的な地名を配することによって、遠く戦地からも日本の日常を思い起こせるように作られているのではないか。また、二つの現実の差異性を際立たせるように詩を配置することで、戦地が人間にとっていかに特殊な場所かを暗に示し、支那という異土に投げ込まれた人々への思いが深まるように意図されているのではないか。

6、「北の銃後」における〈空白〉の詩学

いったい、私は、誰を待っているのだろう。はっきりした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争がはじまってからは、毎日、毎日、お買い物の帰りには駅に立ち寄り、この冷いベンチに腰をかけて、待っている。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、こわい。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいったい、私は誰を待っているのだろう。旦那さま。ちがう。恋人。ちがいます。お友達。いやだ。お金。まさか。亡霊。おお、いやだ。

もっとなごやかな、ぱっと明るい、素晴らしいもの。なんだか、わからない。たとえば、春のようなもの。いや、ちがう。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やっぱり、ちがう。ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍らせて待っているのだ。眼の前を、ぞろぞろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠をかかえて、こまかく震えながら一心に一心に待っているのだ。

太宰治の「待つ」は昭和十七年（一九四二年）の作だが、時局にふさわしくないとのことで規制を受けた作品である。本来は『京都帝国大学新聞』三月号に掲載される予定だったがかなわず、同年六月に刊行された女性独白体小説九篇を集めた太宰治の創作集『女性』（博文館一九四二年六月）に収められた。女性独特の軽妙な語りを用いつつも、何を待っているかを明示しない小説だ。〈待つ〉対象は、「私」本人にもとらえられない漠然としたものとして描かれる。あるいは、あえてはっきりと定義しないという方法が採られている。

中原中也「いのちの声」（『山羊の歌』所収　昭和九年刊行）もまた、求める対象を明示しない詩だ。

僕はその寂漠の中にすっかり沈静しているわけでもない。
僕は何かを求めている、絶えず何かを求めている。
恐ろしく不動の形の中にだが、また恐ろしく憔れている。
そのためにははや、食慾も性慾もあってなきが如くでさえある。

しかし、それが何かは分らない、ついぞ分ったためしはない。
それが二つあるとは思えない、ただ一つであるとは思う。
しかしそれが何かは分らない、ついぞ分ったためしはない。
それに行き著く一か八かの方途さえ、悉皆分ったためしはない。

そして同じく中原中也の「言葉なき歌」（『文学界』昭和十一年十二月号）。「あれはとほいい処にあるのだけれど／おれは此処で待ってゐなくてはならない」と始まるこの詩もまた、「あれ」の正体を明示することなく「待つ」姿勢だけが語られる。

これらの小説や詩の共通点は、対象がはっきりと語られないこと、求めながら何かを待っていることである。戦争に傾斜する中で、小説や詩は対象を空洞化しながらも、善や悪を確定せずに、その対象にまつわる周縁的な言葉を駆使する方法にたどり着いている。高島高には太宰治に関する詩が二つある。『北の貌』（昭和二十五年　スガキ印刷工業株式会社）所収の「自虐　―太宰治氏に手向く」と『続北方の詩』（昭和三十年　スガキ印刷工業株式会社）所収の「或日の北国　―太宰治氏の一章に」である。誰からも理解されない自意識の過剰さやそのことに起因する孤独について寄り添った内容の詩である。また、中原中也についても「夏も終わりに　―わがささげる追慕」（『北の貌』所収）という詩がある。立原道造と中原中也が詩の中に登場するこの詩は、過ぎゆく夏のわびしさが夭逝した二人の詩人の死になぞらえながら描か

れている。高島高にとって太宰治や中原中也は意識するべき大きな存在であり、その文学的な方法に対しても関心を抱いていたことが推測され、大変興味深い。また、本論からは逸れるが、『北の貌』『続北方の詩』が、高島高の故郷である富山県のスガキ印刷工業株式会社（当時の住所は富山市古鍛冶町五九で、須垣久作が印刷者）で印刷されていることも興味深い。

ところで、高島高の『山脈地帯』「第一部」には「北の銃後」という詩がある。その一部を引用する。

人々は待っているのだ
終日山をみつめながら人々は幾日も幾夜もじっと待っているのだ

そしてこの詩の後半には次のような詩句がある。

やがて雪が来ようとしているこの山麓の町に
その雪を踏みくだいてあの山のずっとむこうから必ずやって来なくてはならないものがあるのだ
やって来なくてはならないものがあるのだ
と人々は信じている

この詩は四章で構成されており、詩の最後には「この度の戦いに友人幾多の戦死に遭遇し感慨措くところを知らず。」という「附記」がある。友人たちの戦死を悲しむ気持ちが伝わってくることから、「戦争の詩」であることは明白だ。しかし、用いられている詩法は太宰治の「待つ」、中原中也の「いのちの声」「言葉なき歌」にあるように、あえて〈空白〉をつくることで何を待っているかを明示しないというものだ。北アルプスの小さな山麓の町に降る雪を踏み砕いて「やってこなくてはならないもの」が何か、それははっきりとは語られない。ただ人々は緊張し、何かと真剣に助け合いながら〈待っている〉。

「門毎の日の丸の旗以外に／何物の信仰も尊ばれなかった」という詩句からは、北方の片田舎の小さな町にさえ全体主義が浸透している様子が伝わってくる。と同時に、この詩の語り手である「田舎の医者」が、思想や信仰が制限された自分たちの不自然な状況を自覚的にとらえていることがわかる。自分たちを取り巻く戦争の影響をどことなく知りつつも、〈何か〉を〈待っている〉銃後

の人々。戦場の正確な情報こそ得られないが、〈何か〉を一心に〈待つ〉姿勢だけが残る。対象を明示しない方法のみが可能にする〈空白〉へのさまざまな言葉の代入可能性がここにはある。このような作品を読むと、戦時、ものをはっきりと述べることから距離を取り、時局に対して中庸を保とうとした芸術家たちのしたたかな方法意識に触れることができる。「あくまでも対象を明示しない」という方法意識だけが明示されているのだ。

7、医師の眼

高島高の詩は〈医師の視点〉が入ることによってその魅力を増す。

『山脈地帯』「第一部」のラストに配置された「野戦病院への手紙」はまさに医師の視点から描かれた詩だ。「野戦病院への」とあることから、この詩が野戦病院に宛てて書かれたものであることがわかる。

ちょっとの擦り傷だと云って来たが
それはどの程度の傷か僕にはようくわかる
繃帯をしていてわからぬと思うから
君はそんなことが云えるのだ
君たちの仲間は
みんな繃帯をしてベッドにかくされているから
そんなことはなんでもないと考えている
そして人々にその程度のことを話し
君たちは平気な顔で笑ってさえみせている
それは君たちは君たち以上になっているからだ
肉体の傷以上に魂が磨かれているからだ
と僕は考える
君の繃帯の中にかくされてある傷のことは
君が云わなくても医者である僕にはわかっている
それはわれわれの日常では殆んど見かけない程の傷だ
だがそんなことを君は何んとも思っていないことも
突撃する日の丸の旗と鉄兜と
曠野の草と崩れたあか土と
そうだ君の祖国愛は君を君以上にしているのだ
日の丸の旗の下に
君はいま鬱勃として崇高だ

それは民族としての崇高さだ
君の血液にも不肖僕の血液にも流れている
それは日本人としての崇高さなのだ
肉体を投げた人類最高の強さは
君を尚その負傷から切りはなさせているのだ
君のあせるのも無理はない
そして戦争というものも
非戦闘員である僕にもあらましわかって来た
（進め！　あたってくだけろ）
それは祖国のためにだ
それは自分を生んだ国のためにだ
その言葉の実用を最も忠実に行った君
そういう君があらゆる兵士の一人一人なのだ
僕たちにはわかる
僕たちにはわかる
日本が
どんなに強く
どんなに負けないかは
だが待ってくれ給え
君がいましきりに欲している

白いベッドと白い繃帯を
荒漠たる曠野と鉄兜に代えようとする以上に
君の魂は充分にたたかっている
たたかっているのだ
と僕は云いたいのだ
君の晴れの日を祝ったあの北方の山河は
いま君の名誉の負傷を知っているかのように
常以上に生き生きとした秋晴れを装っている
そして悠々と自信たっぷりだ
しずかに落ちついた君よ
いま君はさらに尚重要な非戦の戦士なのだから
それは犠牲というもの以上の尊さだ
君の血をようく知っている僕
僕の血をようく知っている君
このような君と僕は
あらゆる国民全部の君と僕だ
一つの巨大な流通
それは国民全体の血液の流通なのだ
手段や科学や主義以上の流通なのだ
それが今しっかりと　手を握って

戦って　構えている
それ以上僕たちは何を云うべきであろうか
何をあせるべきであろうか

詩の語り手「僕」は、野戦病院に手紙を書く医師という設定である。「君の晴れの日を祝ったあの北方の山河」が「君の名誉の負傷を知っているかのように／常以上に生き生きとした秋晴れを装っている／そして悠々と自信たっぷりだ」に見られるように、故郷の悠々とした風景に戦地での「君」の勇姿が投影されている。本稿第四章で述べた仮構の〈戦地〉と〈北方〉との関係性がここでも導入されている。

兵たちは怪我を負い、戦うことができなくなったことに負い目を感じている。それゆえ、重篤な状態にもかかわらず、自分の負った傷を隠そうとする。矜持と申し訳なさの両面を持った負傷兵の内面。そんな彼らの心中を察している医師である「僕」は、彼ら負傷兵に「手紙」で語りかけるのだ。身体は傷ついても「君」は十分に精神的な面で戦っているから、今は回復を図るべきだ、と。傷ついた者をいたわる医師の視点が生きている。〈傷〉は現実の身体を削る痛みを伴った厳然とした現象だ。それは概念ではない。イデオロギーでもない。明らかな生身の身体に関わる状態だ。戦場で負った特殊な傷を、医師はけして見落とさない。

非戦闘員である医師の視点は、兵士よりも遠巻きに戦争を眺める視点を仮構し得る。それが医師の視点に与えられた独自性を保証する。「そして戦争というものも／非戦闘員である僕にもあらましわかって来た」という詩句は、この医師が、戦争の「あらまし」、つまりは仕組みやシステムの正体を理解し始めた、ということを意味する。戦争の「あらまし」とは「（進め！　あたってくだけろ）／それは祖国のためにだ／それは自分を生んだ国のためにだ／その言葉の実用を最も忠実に行った君」のような人間を量産するシステムのことを指す。このような詩句は、戦意昂揚のフレーズの「実用」を知り、国民に「忠実」な実行を強いるシステムの存在を看破した者だけが発語できる種類のものだ。また、「僕」は戦争が何かを手中におさめるための「手段」であり、精神性や民族性とは別次元の「科学」の成果によるものであり、時流によって変化する可能性のある「主義」によっていること

を知っている。「僕」は前のめりに戦争に向かっていくこの国のからくりに対して自覚的な語り手だ。「僕」は、医師の視点を借りて遠方から戦地に「手紙」を書くという間接的な方法の中で、戦意高揚というよりはむしろ、傷つきながらも戦おうとする者たちをなだめ、兵士たちの矜持を守り、誇りを損なわないように配慮しながらも抑制のきいた立場で詩を展開させていく。それは軍の強さを信じながらも、「だが待ってくれ給え」と語りかけ、傷ついた身を祖国に捧げようとする負傷兵に何とか休息を与えようとする「僕」の姿勢に強く表現されている。傷を負い、戦死することが報国につながるという幻想に、この医師は歯止めをかけているとも言える。医師の視点の導入によって、「僕」の語りはナショナリズムに完全には統合されていかず、あくまでも「非戦の戦士」である「あらゆる兵士のひとりひとり」に向けて投げかけられたものになっている。この詩の価値は、激化する時局に巻き込まれながらも、戦いそのものをいさめる要素を持つところにあると言えよう。

8、おわりに

本論考では、高島高の「戦争の詩」について詩法の面から考察を加えてきた。詩法のない詩は存在しないとするならば、『山脈地帯』に収められた「戦争の詩」はきわめて方法的であり、そこにこそ詩人独自の表現が息づいていることが確認された。

そして、太平洋戦争が激化し、終戦の昭和二十年に向かって詩人たちの言葉もまたその姿を変えていく。時局によって書かされたという視点ではなく、いかなる状況であろうと、詩は、詩人自らの判断で選択された言葉によって創り出されたという視点で考えるならば、「戦争の詩」もまた強烈な詩意識によって創出された異形を持つことになる。今後は終戦の昭和二十年前後までの高島高の詩や詩意識について考察を加えていくことが必要となるだろう。これについては稿を改めたい。

※　高島高の詩の引用はすべて『詩が光を生むのだ　高島高　詩集全集』(二〇一三年十月十五日　高島修太郎発行　桂書房)によった。

※　この論文は平成三十年八月に「富山文学の会」で発表した内容をもとにしたものである。